



Ⅱ型プラネタリウムが展示されています。現在の科学館に移転する際に一緒に引越しをして、現在まで25年のあいだ静態展示をしています。そんな中、2013年1月、電気科学館開館75周年を記念してスペシャルナイト「“わが町”の天象儀」という行事が企画され、ツァイス投影機の星を映すという試みが行われました。準備段階で、行事を担当した石坂学芸員は機械の状態を点検し整備をしました。しかし、現役時代の投影機を扱った経験はないため、日本で現役最古を誇る東ドイツ製ツァイス投影機を持つ



写真2:ツァイスⅡ型投影機の状態を点検する明石市立天文科学館の長尾高明館長。

つ明石市立天文科学館の長尾高明館長に依頼し、機械の状態を見ていただく事になりました。というのも、長尾館長は明石のプラネタリウム整備の経験を持ち、ツァイス製大型機のメカを知り尽くした数少ないプロなのです。そこで、機械を点検した感想を改めて伺ってみました。

「2012年の某日、「大阪市立電気科学館の開館

75周年を記念して恒星を再点灯したいので、まだ本当に電球が光るのか点検してほしい」という連絡がありました。電気科学館のプラネタリウムと言えば、ドイツが東西に分かれる前のカールツァイス社製です。明石市立天文科学館のプラネタリウムより23歳年上、日本に来た10台のドイツ製プラネタリウムの1台目なので、もちろん2つ返事で引き受けました。

プラネタリウムは無数のギアが絡み合って動くため長期間停止していた影響で駆動系の再稼働は難しいかもしれませんが、照明系はフィラメント切れとスリップリングの接触不良さえなければ回路が簡単なので再点灯は可能な状態でした。テスターでチェックしたところ幸い、恒星用電球のフィラメントは切れていませんでしたので、スリップリングを経由せずに、商用電源からスライダックを通して直接電球の端子に接続すれば点灯と調光が可能になりました。保存状態がすこぶる良いので整備の仕方したいでは再稼働も可能かもしれませんね。明石のプラネタリウムも20年前の阪神淡路大震災で3年2か月停止していましたが、無事再稼働しましたので。」



写真7(左):明石市立天文科学館
の投影機

写真8(右):現役時代の名古屋市
科学館の投影機



芸員の一押しは、ドナチ彗星投影機。「これは北半球の恒星投影機部分に取り付けられた小さな投影機で、国内では大阪と明石の2台にしかありません。しかも両者では形と内部構造が異なっていて、20年のあいたの小さな進化を実感できますよ」と薦めています。機会があれば探して見比べてみて下さい。

■プラネタリウムの歴史を生かす

今回、電気科学館から受け継いだプラネタリウム資料をワーキンググループで調査しました。これらから、グループとして今後に向けての新たな視点が一つ見つかったように思います。筆者も、電気科学館OBへの聞き取りなども含め、調査を継続したいと考えています。

しかし、ワーキンググループの活動は単なる懐古趣味から行っているのではありません。プラネタリウムの歴史を通じて、その科学的意味や、理科教育の観点からの意義、そしてプラネタリウムの社会的な意味も含めて広く検討し、今後のあり方を考える一つの指針を見出したいと考えています。今後も新しい知見を公表していきたいと考えています。プラネタリウムファンの方はぜひご期待下さい。

かず つくと(科学館学芸員)